

オモロの表現：〈生産叙事〉の視点から

島村, 幸一 / SHIMAMURA, Koichi

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

181

(終了ページ / End Page)

225

(発行年 / Year)

1992-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002607>

オモロの表現——〈生産叙事〉の視点から——

島村幸一

一、はじめに

琉球弧における長詩形の歌謡には、ものの起源やものづくりを謡ったウタが散見される。小野重朗によって、〈生産叙事歌〉と名付けられたものがそれである。小野は、これらのウタを沖縄本島の「天親田」^{アマウエヂ}や座間味村に伝わる「嶽ねーいぬウムイ」とともに論じて、謡われる神話としてとらえたのであった。⁽¹⁾その後、小野に刺激を受けた古橋信孝は、〈生産叙事〉を「本来始源の神援の製法をうたうことで、そのものが神のもの、つまり最高にすばらしいものであることを表現したものだ」とした。⁽²⁾古橋によって〈生産叙事〉が、はじめて文学表現の問題になったと考えてよい。本稿も、両者

の仕事に負っている。

まず、はじめに〈生産叙事〉について若干説明しておくために、沖縄本島、及び周辺の島々に伝わる長詩形の歌謡、クエーナの中から船造りの〈生産叙事歌〉を次に引く。

ここで船作りのウタを引くのは、オモロに船作りの〈生産叙事歌〉が比較的にみられるからである。なお、以下引用するオモロ以外のウタは、『南島歌謡大成 沖縄篇上』同『奄美篇』⁽³⁾による。

〈例1〉

132 タマガーラ買イニ大和旅 (国頭村奥間)

エーヨー〈掛ケ声〉

一 おーぬやま くまがやい

エイヤー エイヨー ホーライ〈囃子〉

〈以下掛ケ声と囃子は省略〉

二 いじゅぬきや くんたていてい

三 いちはうぬ うちかきてい

四 ななはうぬ うちかきてい

五 なぎすらや ちりはんち

エーヨー〈掛ケ声〉

奥武の山に踏み上がり

エイヤー エイヨー ホーライ〈囃子、以下略〉

イジュの木をくん立てて

五刃斧を打ち掛けて

七刃斧を打ち掛けて

丈梢を切りはずして

六 はらすらや すすりやい

七 やまぐちに ぬんざさい

八 いなぐたーや するたがや

九 まさぐばま ひきうるち

一〇 なんざぜーく ゆいたるり

一一 くがにぜーく ゆいたるり

一二 なんざしぐ うちかきてい

一三 くがにしぐ うちかきてい

一四 とうだなふに はぎうきてい

一五 なんざばや うしたていてい

一六 くがにばや うしたていてい

一七 うきていみば うきすらさ

一八 はらちみば はいずらさ

一九 ざんぶぶや ひきうるち

二〇 どうるうみん はいくまち

二一 どうるうみん わきんちてい

はら梢を削ぎとりやり

山口に乗り出しやり

女達は揃ったかね

真砂浜に引き降ろして

りっぱな船大工を呼び頼み

優れた船大工を呼び頼み

りっぱな小刀をうち掛けて

優れた小刀をうち掛けて

十棚船を接ぎ浮けて

りっぱな柱をおし立てて

優れた柱をおし立てて

浮かべてみると浮かぶことの見事さよ

走らせてみると走ることの見事さよ

ざんぶ帆を引き降ろして

静かな海に走り踏ませて

静かな海に分け出でて

二二やまとうどうまいん ちちやびたん

二三たまがさら わがかみてい

二四かみていまた むどうるみち

二五うくぬすや すーあらさ

二六へどぬすや なみあらさ

二七たまがばら わがぬらち

二八いちゃしまた わがぬるに

二九ぐひちまた うんぬきが

大和泊に着きました

玉珈玻璃を私が戴いて

戴いて又戻る道

奥(地名)の潮は潮の荒いことよ

辺戸の潮は波の荒いことよ

玉珈玻璃を私が濡らして

如何にして我が祝女に

御返事を申し上げようか

〔平敷屋朝敏の文学〕

ウタは、沖縄本島北部に広く行われているウンジャミと呼ばれる祭りに謡われるもので、やや分りにくいものの、船を造って大和に玉を買いに行き、困難を克服して祝女(のろ)が祭りに身に着ける玉をもたらず、といった玉の由来を謡ったウタであるとして理解されるものである。ウタは、その玉の由来を船造りから謡い出しているが、これがまさに〈生産叙事〉なのである。すなわち、それは一から一四までにあたる表現で、聖地「おーぬやま」「おー」は聖なるものを表す言葉で育ったイジュの木を「いちはいぬ／ななはいぬ」「いち(五)」「なな(七)」は聖数で製材し、「やまぐち」に引

き出し、女達を集めて「まさぐばま」に引き出し、そこで「なんざぜーく／くがにぜーく」「なんざ(銀)／くがに(黄金)は美称辞、以下同じ。「ぜーく」は細工で大工のこと」を頼んで、「なんざしぐ／くがにしぐ」「しぐ」は方言で「シーグー」、小刀の意だが、ここでは木を削る大工道具か)で木を削り、「とうだなあに」を接いで浮かべたというものである。この〈生産叙事〉は、続く「なんざばや うしたていてい／くがにばや うしたていてい／うきていみば うきずらさ／はらちみばはいずらさ」があるように、すばらしい船を浮かべ走らせることができた根拠を示した表現であり、玉を買うために大和への往還を遂げることができた船の航行の無事を保証した表現である。つまり、〈生産叙事〉はものの聖なる起源と理想的な生産過程を謡って、ものを誉め称える表現なのである。米の〈生産叙事〉は、稲種の聖なる渡来や神による田ごしらえから謡い始めるものだが、これが米や神酒を称えた表現であり、家造りや鼓造りの〈生産叙事〉は、材料となる木の神の手になる植え付けや聖なる場所への植え付けから謡い始めることにより、これが新築した(する)家の、造った(造る)鼓の言祝ぎとなるのである。〈生産叙事〉は、神や神に位置する者の手になったことにより、また、聖なる空間や時間を出自としてることによって、聖なる起源が表されるのと、理想的な生産過程が表されることによってものが誉め称えられる、様式性をもった表現なのである。(例1)でいえば、船材になったイジュの木が「おーぬやま」にあったことがまず重要で、「おーぬやま」の「おー」は、例えば沖永良部島の伝わる有名な「島建ていしんこ」にてでくる「おーな／みきぬな」(聖なる

名／御子名)の「おー」であって、聖域を示す山にイジュの木が生えていたことを根拠にして船材の聖なる出自を表しており、以下は生産過程を美称辞を交えながら叙事することで、理想的な造船工程を表しているのである。このように、〈生産叙事〉は大きく、前半の聖なる出自を示した部分と、後半の生産過程を示した部分とに分かれるが、ウタによっては前者の表現に多く比重を置いたものと、後者の表現に多く比重を置いたものを見ることが出来る。前者に比重を置いたものは、〈生産叙事歌〉や、ウタの中にある誉め詞化した〈生産叙事〉にみられ、後者に比重を置いたものは、八重山の稲が種アヨー等にみられるような比較的長詩形のウタにみられる。特に、前者に表現の比重を置くものは、短形の〈生産叙事歌〉の様式として存在しているといってもよい。

以上は、〈生産叙事〉表現の様式について述べたことになったが、この様式によって誉め称えられたものは、〈生産叙事歌〉においてどのようなものとしてあるのか。詳しくは後述する拙論を参照してほしいが、それは、基本的には神や神の側に立つ者へ、捧げられるかたちをとっているということである。本例では詞章としてはつきりしたかたちで出てこないが、大和からもたらされた玉が祝女に捧げられることが示されていると考えてよい。米の〈生産叙事歌〉でいえば、祝女や時には王等に神酒や米が捧げられるものとして、漁労の〈生産叙事歌〉は贈が祝女等に捧げられるウタとして、布織りのそれは神や恋人に捧げられるウタとしてあるのである。つまり〈生産叙事〉は、神や神の側に位置する者に捧げるものをその神話的な始源に溯って誉め称える表現であるのだ。

本稿は、〈生産叙事〉に関して検討した二本の拙論「琉球弧の『生産叙事』歌謡——表現様式を中心に——」と「琉球弧における〈生産叙事〉表現の諸相」⁶⁾を踏まえて、オモロにおける〈生産叙事〉表現について考察したものである。これまで述べてきたことは、前稿を本稿にかかわる範囲で整理し、まとめたものである。

二、「おもろさうし」の〈生産叙事歌〉

〈生産叙事〉表現は琉球弧の長詩形のウタにおいて広くみられるものだが、オモロの〈生産叙事〉表現は豊かなものではなく、むしろ乏しくさえある。『おもろさうし』一五五四首中、〈生産叙事〉表現がまとまってみられるものは、次に示す一三—792がほとんど唯一のものといつてよからう⁷⁾。

〈例2〉

第一三—792 (47)

とまりみちへりきうかふし

一五くまのまころくよ

うききよら はりやせ

又たらかいなてころ

五くまのまころ子(船大工)よ

浮き清ら(船の美称)を走らせよ

太郎子かい撫でころ(船大工か)

又こゑしのは たかへて
 又おなりかみ たかへて
 又ひかたけに のほて
 又おほかくち のほて
 又よかるけは あらて
 又きやきやるけは あらて
 又もつつけな (な) つけて
 又やまつけな な つけて
 又すらからのはやおうね
 又すゑからのはやおうね
 又なはとまり はりやへは
 又おやとまり はりやへは
 又も、おうねのふなさき
 又やそおうなのふなさき

こゑし (神女名) を崇べて
 おなり神を崇べて
 東嶽に上つて
 おほか口に上つて
 良かる木を選んで
 輝やく木を選んで
 本付け縄 縄 付けて
 山付け縄 縄 付けて
 すら (造船場) からの早御船
 巢 (造船場) からの早御船
 那覇泊走り合へば
 親泊走り合へば
 百御船の船先
 八十御船の船先

このオモロは前半で船作りが謡われ、その新造船に貢納物を積み込んで那覇へ向かつて走つてゆく

と、数多くの船が同じように貢納物を積み船先を那覇へ向かつて走つていくというウタである。一三巻は、巻ごとにあるいは地域ごとに、数首から二十首前後にわたる規模で、同じグループのオモロがまとまって排列されていることが推定されるが、このオモロも、少なくとも一三一—79 (34) から十四首連続してみられる久米島関係のオモロに属するものであらうと推測される。⁽⁸⁾したがって、これは、久米島からの貢納物を王都首里の港である那覇へ運ぶことを謡ったオモロであり、結局はそのことをとおして各地からの貢納物が数多くの船によって運び込まれる那覇の賑わい、王国の繁栄が賛美されたウタであると考えられる。それはともかくとして、那覇への貢納物を載せて走る早船の船造りを謡ったオモロの前半部は、まさに〈生産叙事〉である。船大工だと思われる「五くのまころく／たらかかいなてころ」が、「おなりかみ」である神女「こゑし」を祈り称えて、聖地「ひかたけ／おほかくち」に上つて、すばらしい船材となる「よかるけ／きやきやるけ」を選び、それに縄を付けて山から降ろして「早御船」を造つたと、造船過程を表現しているのは、前述したことく〈生産叙事〉を根拠として「早御船」のすばらしさを示した表現である。「ひかたけ」は、他にも一三一—952・955、一四—989に用例がみられ、このうち第13巻の二例は久米島のオモロだと確定できるものである。オモロの「一嶽」は、もちろん聖域を示す言葉だが、「一嶽」の用例中実際の地名としての用例——例えば、「かつおうたけ」(沖繩本島本部の嘉津字嶽、一三一—934他)、「おもとたけ」(八重山のおもと嶽、一一—558他)、「さやはたけ」(本島知念村の斎場嶽、一一—34他)、「たみなたけ／しめたけ」(沖永良部島

の大山か、一三—940——は、高い標高を持った山岳を示したものであることが多く、この「ひかたけ」も『角川日本地名大辞典 沖縄県』⁽¹¹⁾（以下、『地名大辞典』とする）が記しているように「久米島の仲里村島尻の現集落の西方にある比嘉岳のこと」としたのは、うなずけよう。⁽¹²⁾「ひかたけ」は、『仲里旧記』『琉球国由来記』に「島尻村」の御嶽としてみられ、久米島の聖地としてあることは、間違いない。対句の「おはかくち」も、「おは」は〈例1〉の「おーぬやま」の「おー」と通ずるもので、前述したごとく聖なるものを表す言葉であらう。⁽¹³⁾この対句は、ともに聖域を示す語であり、船材の聖性を表しているのである。

このオモロの表現構造は、はっきりしていよう。前半の〈生産叙事〉が、後半の表現を支えているという構造である。つまりは、「すら」（造船場）から「すゑ」（果、オモロでは船は島に比喩される）から既に「早御船」であると語られるすばらしい船の根拠は、前半の神話的（理想的）な生産過程によっているということなのである。その「早御船」が、王府への貢納物を積み込み那覇へ向けて船を走らせると、数多くの船が船先を那覇へ向けていると謡い、最終的には王国の繁栄が賛美されている。まさにオモロが繰り返し謡う王権の賛歌だといえよう。

では、他のオモロの〈生産叙事〉はどうなっているのだろうか。前述したように、〈例2〉のようなまとまりをもった〈生産叙事〉表現は、オモロには他にみることができない。オモロにみられるのは、短形化したかたちになっている次のようなものである。

〈例3〉

第一三—878 (133)

しよりゑとのふし

一やまのくにかねか

なて、おちやるこまつ

あんしおそいに

世かほうせち みおやせ

又ほこりころかまか

ともまさり けらへて

又ほこりころかまか

しまとつけ けらへて

いてらかす

そて たれて はりやせ

〈例4〉

第一三—943 (198)

山のくにかね（神女）が

撫でていた小松

按司襲いに

世果報せぢを奉れ

誇りころがま（優れた男）が

艦勝り（船名）を造り整えて

誇りころがまが

しまとつけ（船名）を造り整えて

航海に出ることに

袖を垂らして安全に走らせよ

しよりゑとのふし

一とくやまのなてまつ

おやおうねは すたちへ

とふとりと いそいして はりやせ

又にしたけのなてまつ

徳山の撫で松

親御船を舁して (造って)

飛ぶ鳥と競って走らせよ

西嶽の撫で松

〈例3〉と〈例4〉のオモロは、船材の聖なる根拠を前者はそれを育てたものである神にもとめたウタであり、後者はそれが育った空間(土地)によったウタである。〈例3〉の「やまのくにかね」の「くにかね」は、九一四八に「あかすくにかね／くにかねのしろい」、同じく四九三「あかすくにかね／あかすくにもり」、二〇一¹³⁶⁴に「かねくすくのろ／くにかねのろ」と神女をさす用例が確認される語であり、また「やまのくにかね」についても『混効験集』は、「山の神の事なり」、「言葉聞書」(いわゆる「原注」のこと)も同様な注書き「やまのかみの事也」とあって、少なくとも「神」という理解をしているものである。「やまのくにかね」は、神(神女)ととらえて誤りなからう。その「やまのくにかね」が、「なて、おちやるこまつ」によって、船大工もしくは船頭と考えられる「ほりころかま」が、「ともまさり／しまとつけ」(船名、あるいは船の美称)を「けらへて」(造り整えて)と謡っているのである。「ともまさり／しまとつけ」のすばらしさ、安全性は「やまのくにかね」が

「なて、おちやるこまつ」を船材にしているところにあるといえる。逆にいえば、つまり神(神女)によって育てられた聖なる木が船材になっていることによって、船のすばらしさが保証されていることになっているのである。後者の〈例4〉は、「とくやまのなてまつ／にしたけのなてまつ」とあるように、飛ぶ鳥と競って走る親御船の優れた根拠が、その船材になっている聖域「にしたけ」の「なてまつ」にあることは、言うまでもなからう。この例は、船材となった木が聖なる空間で育ったものであることを示したものであるのだ。

さて、〈例3〉〈例4〉と、冒頭に紹介したクエーナの〈例1〉、またオモロにおいてまとまった〈生産叙事〉のみられる〈例2〉とを比較してみると、この二種のオモロは、生産過程を略したかたちになっていることがわかる。つまり二例は、その木を育てた神や、その木が育った土地を示すだけで船材の聖なる根拠を表し、船造りの理想的な生産過程を謡わないものだということができるのである。これは〈例1〉や〈例2〉にあるようなまとまった叙事表現の冒頭部分が残し、以下が省略されたものだと考えることができるだろうが、総じて、オモロは琉球弧の長詩形の歌謡の中にあつては、短形のウタが多いという傾向をもつ。このことから、始源的な姿がどうであつたかはともかくとして、二首のオモロは後半の生産過程が省略されたウタではなく、謡われた当初から引用したような姿であつたと、考えることができるだろう。つまりは、〈生産叙事〉が様式化されたものとして、このオモロがあつたということだ。その様式とはこの場合、誉め称えるものが、聖なるものに起源している

ことに比重を置いたものである。もちろん、この様式は、具体的な生産過程の叙事に重きを置かないことから、ウタのかたちは短くなることになる。いわば、〈生産叙事〉の短詩形の様式であるといえるだろう。この様式で謡われているウタは、当然、オモロにばかりあるわけではない。次に示すようなウタにも、みられるのである。

〈例5〉

80 ニシンダケノオモイ (久志間切)

一にしんだけの いよ、きヨラ

二ひぎゃのだけの いよ、きヨラ

三とはエるうどん げらいて

四にらえ かねや

五ふんだエ ふでらすう

六おやのかみの うるさあて

七うなゐがみ さきだちャウレ

西の嶽の節々清ら

東の嶽の節々清ら

十尋御殿を造り整えて

ニラエ・カネは

ふんだえ ふでらすう

親の神が降ろそうとて

オナリ神先立ち下さい

〔諸間切のろくもいのおもり〕

四節・五節(特に、五節)の意味がわかりにくいのが、神を迎えるために神殿である「うどん」を造り整えることを謡っているのが、ウタ全体の内容だと思われる。その神殿を造るための木材を称えた表現が、冒頭の「一にしんだけの いよ、きヨラ 二ひぎゃのだけの いよ、きヨラ」という表現である。木材の聖なる出自が、対句のかたちで短く表現されているのである。このように、オモロ以外にも様式化された〈生産叙事〉は、みられるのである。さらに興味深いことは、〈例5〉のウタは、約七〇年余り後に採集されたものでは「一ひがぬきんすらち(東の木も揃わせて) 二にしぬきんすらち(西の木も揃わせて) 三うやぬかみぬ うるさあていどう(親の神が降ろそうとしてこそ) 四うないがみ さきだていてい(姉妹神を先立てて) 五はしらだてい(柱立て) 六にーあぎ(棟上げ) 七ふちよていうゆえ(貰いておいて御祝い)」(24 ニシンダキウムイ⁽¹⁵⁾ 久志村汀間)と変化しており、冒頭二節は、例えば「ニシヌキーンユシテイ ヒザヌキーンユシテイ タティティムニアギテイ フチオーティ ウユエー」(『沖縄民俗』第17号・69年、与那城村宮城の新築祝の唄)といった沖縄本島で広く謡われる琉歌形式の新築儀礼歌の上句と同類の表現なのである。これは、琉歌形式の新築儀礼歌の上句が、〈生産叙事〉と同じ意味を担ったものであることを考えさせることになる。つまり、この琉歌の上句の表現は〈生産叙事〉に由来したものであり、短型化した〈生産叙事〉が、琉歌の表現をも構成しているということなのである。

三、〈なでる〉という言葉

ところで、〈例3〉でも明らかなのだが、「なで、おちやるこまつ」の〈なでる〉（撫でる）という語に注目すれば、この語は神の行為、神の側に立った言葉としてあるということが出来る。これも、言葉の上から〈生産叙事〉を支えているのである。次に奄美大島のクチを引くが、これは新築儀礼の際に大工がとるものであるという。四〇節にも亘る長いものであるので、該当部分のみを引くことにする。

〈例6〉

91 新築家祭り（大島）

（前半省略）

八きさどんがなしぬ	きさどんがなし（山の神）が
九なでん なでたる	撫でに撫でた
一〇みちばから ゆちば	三つ葉から四つ葉の若木
一一なでん なでたる	撫でに撫でた
一二ながち きよらきい	長筋の美しい木は

一三ろくまん ろくせん ろつぽん	六万六千六本
一四もれうきいりよんかな	もらい受けますよ
一五むとうば きりはなし	元を切り離し
一六すらば うちはなし	梢を打ち離し
一七いそなわば かけてい	糸繩をかけて
一八しらなわば かけてい	白繩をかけて

（後半省略）

引用の部分は「山の神」「きさどんがなし」（オモロにみえる「けさとの」、「けさとのおやのろ」と同じ神名）が若木から育てた聖なる木によって、家が造られていることを表現している。これで「新築家」を誉め称えていることは、言うまでもなからう。クチの「九なでん なでたる 一〇みちばから ゆちば」は、〈例3〉の「なで、おちやるこまつ」に相当する表現で、神が自ら木を植え、その若木を撫でたことを謡っている。クチは、さらに「一一なでん なでたる 一二ながち きよらきいや」と、りっぱに成長するまで「きさどんがなし」が撫でたことを、繰り返している。〈なでる〉という言葉が、神による重要な行為を示す語としてあるわけである。おそらく、この語には神が慈しみ育てるといった内容があるのだらうと思われる。〈例4〉のオモロの「とくやまのなてまつ」は、

その対句「にしたけのなてまつ」から聖域に生い育った松であった故に、親御船のすばらしさを保証した表現になっているのだが、「なてまつ」という表現自体が、例えば〈例3〉や〈例6〉のような表現を背景とした、あるいは幻想とした表現であることを考えるべきで、この表現によっても、親御船のすばらしさは保証されているのである。したがって、次に示すオモロも神によって撫でられた松が船材となつて、造られたことが謡われていると解されるものである。

〈例7〉

第一三—901 (156)⁽¹⁶⁾

しよりゑとのふし

一きみはいは たかへて

たすこやま のほて

なてまつは けらへて

はねうちかま すたちへ

とふとりと いそして はりやせ

又うまのかかさゑく

まいとのなわ かけて

君南風を称えて

たすこやまに上つて

撫で松を製材して

羽撃ちがま (船の美称) を解して (造つて)

飛ぶ鳥と競つて走らせよ

馬の子 (船大工) が細工をするもの (用材) に

真糸の縄を掛けて

このオモロの冒頭「一きみはいは たかへて たすこやま のほて」は、対句が落ちたかたちだが〈例2〉の第三節目から第六節目の表現に相当するものであるで、「たすこやま」も聖なる場所である可能性が高い。『おもろさうし辞典(第二版)』⁽¹⁷⁾ (以下、『辞典』とする) もここを「嶺名。久米島宇江城嶺」としているが、根拠が示されておらず実際のところはどこであるかよくわからない。しかし、次の「なてまつは けらへて」から、やはり、この山は神が住まう、または依り憑く所であり、その神(このオモロでは、君南風、あるいは君南風の神霊と考えていいだろう)が慈しみ育てた松が、船材となっていることによって、「はねうちかま」が称えられていると解することができよう。このオモロの場合は、「たすこやま」が確定できないだけに「なてまつ」が重要な言葉としてあるといえよう。また、次のオモロも今まで述べてきた〈なでる〉を踏まえて読めば、背景に〈生産叙事〉があつたはずである。

〈例8〉

第三—105 (18)

大ぬしかてんと、ろかふし

一きこゑ大きききや

聞得大君が

なて、おちやるみはやふさ

とよまちへ おるしよわ

又くにもりきや

なて、

又よはははま よりやけはま おるしよわ

又うちすてる かきすてる すらより

撫でていた御準（船名、または船の美称）

鳴響ましてお降ろしなされ

国守りが

撫でて

与那覇浜寄り上げ浜にお降ろしなされ

うち解るかき解るすら（造船場）から¹⁸

このオモロは、東御廻り、あるいは御新下りに関連したウタであろう。「よなは」は現在の南風原町の与那覇で、『地名大辞典』によると「オモロ時代にはこの地域まで海が入り込んでいた」という。オモロは、ここから海岸添いにおそらく佐敷の馬天浜あたりをめざして航海するための船のスラ降し（進水式）を謡い、その船を称えたものであろう。そして、称える船を保証した表現が「きこゑ大きみきや なて、おちやるみはやふさ／くにもりきや なて、（おちやるみはやふさ）」ということになる。王国の最高神女、聞得大君が慈しみ育ててきた船材によつて造られた御準（船の美称、または船名）であると謡うことで、船を称える表現の根拠になっているのである。このオモロを表現としてとらえれば、これはある年の東御廻りや御新下りに際して、たまたま新造船が造られたために謡われたものであると実体的に考える必要はないだろう。与那覇浜から船出しようとする船を始源に溯って

誉め称えたウタであることができるからである。つまり、このウタはある年の東御廻りや御新下りに謡われた一回限りのものではなく、行事ごとに謡われたウタだと考えることができるのである。〈なでる〉についてしばらくみてきたが、この語は神が慈しみ育てたといったような意味を有する言葉であつて、〈生産叙事〉と深くかかわっている側面をもつ語である。『辞典』は、〈なでる〉を「撫で育てる。撫でるように可愛がつて」（「なて、」の項）とか「撫で愛する」（「なてころ」の項）とするが、重要なことはこの語が神の行為としてある言葉だということを忘れてはなるまい。オモロに接頭美称語〈なで〉（「なてころ」「かいなてあちおそい」等々）が頻出するが、この語が美称辞になり得る理由もこの語の立つ位置が神の側にあることを理由としているのである。

四、〈生産叙事〉にかかわる言葉

〈なでる〉が〈生産叙事〉にかかわりの深い側面を有する語であることを述べたが、オモロには、この外にも〈生産叙事〉にかかわる言葉をみることが出来る。主なものを幾つか出せば、例えば〈げらえる〉、〈このむ〉、〈たくむ〉、〈おりあげる〉、〈つみあげる〉、〈うえる〉等がそれであろう。

このうち既にみている〈げらえる〉は、最も用例の多い語である。しかし、この語は例えば「一たまのみそてかなし しよりもり けらへて……又けらへみそてかなし またまもり けらへて」（五¹²⁵）とあるように、聖域や祭場に下接しているような場合には、祭りにふさわしい状態に整備する

といったような意味の言葉であつて、必ずしも総ての用例が〈生産叙事〉的な表現としてとらえられるものではないかもしれない。だが実のところ、〈げらえる〉は、『混効験集』乾卷言語門に「造営并調和の事也」⁽¹⁹⁾とあるごとく、「造営」と「調和」とを包含した言葉であり、それ故に「けらへあやつ、み」(二—609他)「けらへ大ころた」(三—108他)等の接頭美称辞として盛んに使われてもいると考えられる。『辞典』や『日本思想大系 おもろさうし』⁽²⁰⁾の頭注は、もっぱらこの語に対して「造営」の意味のみをとりだした注に終始しているが、〈なでる〉同様、何故これらの語が美称辞にもなり得るのかという、言葉の生成に配慮した注をする必要がある。〈げらえる〉の原義は、調和した理想的な状態にものを造り整えるといった意味の言葉であらう。それは、まさに〈生産叙事〉としてとらえられるものだと考えてよい。

次の〈このむ〉は、『辞典』によれば「工^{たく}んで。工夫して。企画して。考えて。作って」(「このて」の項)とあり、『沖繩語辞典』⁽²¹⁾でも「kunu = nun ○考案する。立案する。計画する。○企てる。策謀する」とあることから、どちらかというところ、つくるという意味よりつくるために前もって考えるという意味合いの強い語だろう。よつて、この語も総ての用例を〈生産叙事〉とかわらせてとらえることはできない。〈このむ〉が、〈生産叙事〉としてとらえることがわりあいにはつきりとしている例は、次に示すような城や御嶽等の石垣造りを謡ったオモロであらう。ちようど、〈おりあげる〉、その対句としての用例が多い〈つみあげる〉、そして、先に述べた〈げらえる〉が連続してでてくるオモロがある。それを、次に引く。

〈例9〉

第一〇—527 (17)

てやんおなちやらかあし
一しよりくになるあんし
又くすくくになるあんし
又しより ちよわるあちおそい
又くすく ちよわるあちおそい
又けおのよかるひに
又けおのきやかるひに
又大きみは たかへて
又くにもりは たかへて
又かみしもは あとへて
又ちはなれ そろいて
又いしへつは このて

首里の国の按司
城(首里のこと)の国の按司
首里のおられる按司襲い
城におられる按司襲い
今日の良い日に
今日の輝ける日に
聞得大君を称えて
国守りを称えて
国中の人々を集めて
離島の人々を揃えて
りっぱなへつ(石を割る道具)を考案して

又かなへつは このて
 又いしらこは おりあけて
 又ましらこは つみあけて
 又なみのうへは けらへて
 又はなくすく けらへて
 又物まいり しまわちへ
 又てらまいり しまわちへ
 又かみも ほこりよわちへ
 又こんけんも ほこりよわちへ

優れたへつを考案して
 いしら子（石の美称）をおりあけて
 ましら子（石の美称）を積み上げて
 波の上権現を造り整えて
 端城の権現を造り整えて
 参詣なさつて
 参詣なさつて
 神もお誇りなさつて
 権現もお誇りなさつて

引用のオモロが、第一〇巻「ありきゑとのおもろ御さうし」に属していることを思えば、このオモロの表現の中心は、後半の「又物まいり しまわちへ 又てらまいり しまわちへ 又かみも ほこりよわちへ 又こんけんも ほこりよわちへ」にあるはずである。つまり、国王等の波上権現（護国寺）参詣を謡ったものであると理解すべきだろう。そう考えれば、前半の「又なみのうへは けらへて 又はなくすく けらへて」までは〈生産叙事〉としてとらえられ、権現の造営を始源に溯つて、すなわち「縁起」として謡い、替め称えた表現だといえよう。ウタは多様な解釈を許容するから、こ

れを護国寺が建立された時代の王、察度の護国寺造営の事績を謡ったオモロだという見方もできる。⁽²³⁾しかし、このオモロを第一〇巻のウタとして理解すれば、先に示したとらえ方をまず考えるべきだろう。「へつ」は石割の道具名。『辞典』によれば、『近世地方産業資料』に『石割へつ量目五斤半、大へつ量目十斤』とある」という。オモロは、「又いしらこは このて 又かなへつは このて 又いしらこは おりあけて 又ましらこは つみあけて」と謡っているが、「このて」は石垣の石（「いしらこ／ましらこ」）を削る「へつ」を前もって考え作っておく、あるいは準備しておくといった意味の言葉だろう。「おりあける」「つみあける」は、多くが対句表現でできて、これも城や御嶽等の石垣を積み上げるといふ意味の言葉としてあるものである。「このむ」や「おりあける」「つみあける」は、主に石垣作りの〈生産叙事〉としてある語だといえよう。

次の〈たくむ〉は、『辞典』では、「工みたる。計画工夫したる」（「たくたる」の項）とあり、『今婦仁方言辞典』にも「工む。新しいものを工夫して作り出す。意匠をこらす」とあることから、〈このむ〉と近い意味をもつ語だろう。用例も〈このむ〉と似て、次にあげる城造りを謡ったオモロに見える。

〈例10〉

第一五一 1066 (15)

きみなしかふし

一ゑそゑそのいしくすく

あまみきよか たくたるくすく

又ゑそゑそのかなくすく

伊祖伊祖のりっぱな城

あまみ子が意匠をこらして作つた城

伊祖伊祖の優れた城

「反復部」「あまみきよか たくたるくすく」は、二―74にも全く同一の「反復部」があつて、類型的な表現だと考えてよい。王権の始祖神、「あまみきよ」が意匠をこらし造つた城だと語うことが、伊祖城の有史以来の始源的なすばらしさを表している。伊祖城を称える根拠は、「あまみきよか たくたるくすく」にあるのである。

最後の〈うえる〉は、文字どおり植えるということだが、この語は鼓造りの〈生産叙事歌〉にみえるものである。

〈例11〉

第一七―1202 (28)

よ、せきみのふし

一うちまおきて

内間掟

おにさんこ

ゑけ ほこら

又あたりやま

かくちやま

又くわけ うゑて

なてす うゑて

又つゝみ つくて

なりよふ つくて

鬼さんこ

あゑ誇ろう

辺り山

かくち山

桑木を植えて

なてす(桑のこと)を植えて

鼓を造つて

鳴り呼ぶ(鼓の美称)を造つて

「うちま」は、このオモロが第一七巻「恩納より上のおもろ御さうし」にあることから、本島北部にある地名と考えるべきだろう。オモロの前後が、現在の本部町具志堅のオモロ、今帰仁村の勢理客のオモロである故に、ここの「うちま」はその近辺を想定してよからう。²⁴ただ、具体的には不明である。「おきて」は、近世琉球にあつては「間切・村の行政責任者」、特に村(字)レベルの「行政責任者」(村掟)をさす語で、村役人クラスの下級役人を示す語である。²⁵ただ、オモロでは村(字)レベルの支配者の人物もしくは、代表的人物であることがうかがえる語であり、古琉球にあつてはもう少し高いクラスの職制を示す語であつたと想像できる。「おにさんこ」は「うちまおきて」の名。

「おに」は美称辞。他にも「おにくすく」(六一三〇他)「おにわし」(一一三—九七)「おにのきみ」(一一六九)等、用例がある。「さんこ」は意味不詳の名だが、第一二巻—二巻等にでてくる「さんことよしゆ／よかるとよたしゆ」の「さんこ」と関連する語だろう。「あたりやま／かくちやま」は、(生産叙事)の始源的なあり方からすれば、聖なる場所を示す語だということになるが、「あたり／かくち」は「今婦仁方言辞典」によれば「屋敷近くにある畑。(途中省略)」「かくち」は宮古方言で *kakutsi* (以下省略)「ハタイ」の項とあり、また「地名大辞典」では、「かくち」は「垣内」で「日本本土で奈良から信越・関東地方にまである地名で、住居の垣の内、名主層の屋敷、時としてはその城館でもあり、垣内山も付属していた。現在も字、小字名として残る」(「うちま」の項)とあるものである。「あたりやま／かくちやま」は、村落近くの山、あるいは「おにさんこ」の屋敷近くの山という意だろう。「なてす」は、首里方言で桑の実を「*mandesii*」(沖縄語辞典)といい、他に桑の木自体を「ナネズ」(石垣)「ナンヂー」(波照間)「ナンヂイ」(与那国)「ナンデーサー」(沖縄久手堅)²⁶等といっているところがあり、オモロの「なてす」は桑の木そのものをいった言葉と解してよからう。鼓を桑の木で造ると謡うのは、例えば粟国島の「きーとまー」、与那国島の「かんだゆ(どんだ)」等の鼓造りの(生産叙事)にもみえるものであり、また狩猟の(生産叙事)の中にもみえる弓を謡った表現(「ヤマノオモイ」(恩納間切)、「猪獲り語れ」(奄美大島竜郷町)にも弓が桑の木で作られていることが謡われていることから、桑の木は実用的な木というよりクネブ(甘橘木)などと並

んで聖木だと考えてよい。オモロでも他に「あかるいのましたに くわけもと ふくとり」(一四—九九)という表現があつて、聖木としての桑の木を示す充分な用例がある。したがって、このオモロは桑の木で造られた鼓と謡われるということで、「つ、み／なりよふ」が称えられているのである。「つ、み」の対句「なりよふ」は、「つ、み」の美称語、鳴り呼ぶものからきていよう。オモロをはじめ、他のウタにもこの語はでてくる。鼓が、祭りの重要な祭具であり、故に「なりとよみ／なりきよら」(二—三七)「なりかなし」(二—八二)「みやかよせき、かなし」(八—四三)「よせうち」(八—四五)等々、様々な異称(美称語)でオモロに登場する。鼓が祭りにおいて重要なもの、神聖なものである故に様々な美称されるのだといえよう。「なりよふ」もその一つなのである。「反復部」の「えけほこら」は、造った「つ、み／なりよふ」を打って、さあ誇り喜ぼうというもの。優れた鼓の靈力が發揮されている状態を喜び称えているのだらう。このオモロは、鼓の(生産叙事歌)だが、「あたりやま／かくちやま」が示しているように全体としてはその聖性が後退して民謡的なものに傾いているウタだらう。琉歌に布織りの(生産叙事)を謡った「あたり芋のなかぐ 引き漂し漂し 大和める里のどんす袴」というものがあるが、表現としてはこのようなウタの方向へ近づいたものだといえる。⁽²⁷⁾冒頭の「うちまおきて おにさんこ」が、「くわけ／なてす」を植えて、「つ、み／なりよふ」を造った者であるとするなら、明らかに神や神女に位置する者とずれている。これも、「あたりやま／かくちやま」と、対応していると考えることができるだろう。オモロは、鼓を称える根拠が、「くわ

け／なです」によって造られた点、それに「うちまおきて おにさんこ」が造ったことを加えてもよいかもしれないが、総体としてはウタの持つ聖性が後退した印象を否めない。

以上、〈なでる〉をはじめとして〈げらえる〉〈このむ〉〈たくむ〉〈おりあげる〉〈つみあげる〉〈へえる〉という〈生産叙事〉にかかわる言葉をみながら、オモロの〈生産叙事〉を追ってきた。〈なでる〉は、慈しみ育てるといった意味の言葉、〈げらえる〉は調和した理想的な状態にものをつくり整えるという意の語、〈このむ〉はつくるために前もって考えるという意の言葉、〈たくむ〉は新しいものを工夫して作り出す、意匠をこらすといった意味の言葉であり、すべてが観点やニュアンスを異にするものの、生産Ⅱつくるにかかわって、それを誉め称えた意味が含まれている言葉であることがわかる。〈おりあげる〉〈つみあげる〉〈へえる〉は、文字どおり生産過程を示す語だろうが、これらも含めて、ここで扱った言葉が〈生産叙事〉としてある場合には、当然ながらこれらは神や神の側に立つ者を主体とした語であり、生産Ⅱつくるにかかわった誉め言葉だということである。

五、まとめ

三や四では、〈生産叙事〉にかかわる言葉をみながら、オモロの〈生産叙事歌〉をみてきた。ここでは、二で扱った船造りの〈生産叙事歌〉に加えて、城や御嶽の石垣造りや鼓造りの〈生産叙事歌〉をみた。『おもろさうし』における〈生産叙事歌〉は、ほぼこれらの種類に尽きるといってよいが、

もうひとつ、布織りの〈生産叙事〉がみられる。それは、恋歌的なものに展開をしている注目すべきオモロである。⁽²⁸⁾ というのは、例えば奄美大島にある布織りの〈生産叙事歌〉、芭蕉ナガレが、聖なる芭蕉の出自と理想的な生産過程を謡うことによって、ユタ（シャーマン）がトランスにはいる際に着る着衣の聖性を表現しているのに対して、オモロは、〈生産叙事〉が男性との出会いを構成する物語の前段的な表現になっており、捧げる対象を聖なる起源に溯って誉め称える〈生産叙事〉の始源的な姿とは、異なったものになっているのである。先にみた〈例11〉とは表現のレベルには差があるが、〈生産叙事〉が同じ方向へ進んでいるものであるということができるといえる。そのオモロを次に引いてみる。

〈例12〉

第一四—983（2）

一はなくすくあんしつきの大や

又花城ちやらつきの大や

又ひとりくわのやくさくわは なちへおちゑ

又ほかあたりに うちあたりに あへる

又はつかりやか したしらひよは ゑらて

玻名城按司付きの大親

玻名城ちやら（按司のこと）付きの大親

一人子のやくさ子を生んでいて

外の辺り（屋敷近くの畑）に内の辺りに（種が）落ちた

はつかりや（未詳）のしたしらひよ（未詳）を

又たちゑらひに すちゑらひに ゑらて
 又はたよみやは みしよみやは しちへお
 ちへ

選んで
 立ち方の優れたものを筋の優れたものを選んで
 二十に読んだものに三十に読んだものにしてい
 て

又はなくすく いちやかわに おれて
 又かせ はゑちへぬのはゑちへ おれて
 又おもひかけす しよりあくかへ いきやて
 又まなたも こか みほしや ありよれ
 又おきてたも こか きよらさ あよれ

玻名城いちや井戸に降りて
 杵糸を流しに布糸を洗いに降りて
 思いがけず首里赤頭部(役職名)と行き合つて
 真人達もこんなに見たくあるぞ
 掟達もこんなに美しく思っているぞ

オモロは、玻名城(現在の沖縄本島南部の具志頭村玻名城)の按司付きの大親(按司の家臣)が一
 人子の「やくさくわ」(この語は不詳だが、やもめを示す方言 *yagusa* と関連する⁽²⁹⁾)である娘を
 生み、その娘が外の辺り(屋敷近くの畑)内の辺りに種を落して「あへる」は、『邦訳日葡辞書』に
 種などがひとりでに落ちることをいうとある⁽³⁰⁾。育った麻の「はつかりや」(辞典)によれば「麻の
 初幹(殻)のこと」。但し、未詳語か)の「したしらひよ」(辞典)には「未詳語。下の白い部分か」
 とある)を選んで、立ち方の優れたものの筋の優れたものを選んで、それを二十読三十読みの精巧な布

にするために準備し、玻名城のいちや井戸(地名大辞典)では、これを「玻名城集落の東南にある
 ンチャガーのことであろう」としている)に降りて、杵糸布糸を延して洗いに降りると、思いがけず
 首里赤頭部(役職名)と行き合つと、娘の噂が広がり真人達もこれをみたくあるぞ、掟達も美しい
 と思っているぞという、内容のものであろう。前半の三節までが人物紹介、四節から六節までが布織
 りの(生産叙事)で、これが男性との出会いの物語りの構成をなしたのになつてゐるのである。こ
 のようなウタは、宮古や八重山にある「物語歌謡」と近い、または同質の世界のものだということ
 ができよう。第一四巻には、この他98にすばらしい衣装を着け、刀を差して、りっぱな鞍をおいた馬
 に跨った英雄を謡ったオモロがある。これは、例えば奄美大島に伝わる「のりがみのおもり」(名瀬
 市大熊)やオモロの一〇—514などにみられる神の移動——この場合は陸上での移動を示すもので、そ
 れは馬に乗った姿として表現される——を示す(巡行叙事)⁽³³⁾が、英雄の姿を謡ったものとしてある
 もので、(例12)と合わせて第一四巻のもつ「物語歌謡」的な雰囲気を感じさせるものである。「物語
 歌謡」は、宮古や八重山に発達している歌謡だが、第一四巻のこれらのウタを置いて考えれば、沖縄
 本島にもかつては「物語歌謡」が存在していたことを推測させるものである。そういう点でも、(例
 12)は貴重なウタである。

とはいっても、オモロの(生産叙事歌)は船造り、石垣造り、鼓造り、それに布織りと決して豊富
 な内容を持っているとは、言いがたい。ここには、他のウタにみられる稲作りや粟作り、漁労や狩猟

等の〈生産叙事〉はほとんどみられない。そして、いまふれた布織りの〈生産叙事歌〉もわずか一首ときわめて少ない。これは、オモロが農耕や漁労、狩猟に関する生業についてのウタをほとんど謡っていないことと、みあっている。オモロが謡っている〈生産叙事〉は、限定された内容の〈生産叙事〉だといってよからう。これは、オモロの特色として充分注目してよい。

さらに、〈生産叙事〉のあり方についてもまとめたものは、〈例2〉に示したものがほとんど唯一のオモロである。しかし、これも〈例1〉に比べてれば、叙事の密度が高いわけではない。オモロの〈生産叙事〉は、短形であるものがほとんどなのである。このことも前述したごとく、オモロは他の長詩形のウタと比べると総じて短形化しているウタであることとみあっている。これについては、他のウタの中に様式化している短形の〈生産叙事〉があり、オモロの〈生産叙事〉も後半部が省略されたものだと考えるよりも、謡われた当初から短形であったのだろうと推測してみた。つまりは、オモロの〈生産叙事〉は様式（この場合は、短形の様式）を前提として成立しているということである。その様式は、誉め称えるものが聖なる起源をもっていることに比重を傾けた表現をし、理想的な生産過程を省略してゆく、あるいは、謡わないというもののだが、他の長詩形のウタが〈例5〉で示されているように、聖なるものの根拠を主に空間的なもの（にしんだけ／ひぎゃのだけ）に置いているのに対して、オモロの場合は〈例10〉や、次に引くオモロにみるように、聖なるものの根拠を〈生産叙事〉の主体者、もののつくり手に置いている例が比較的が多い。これは、オモロの特色だろう。

〈例13〉

第17—1204 (30)

ちやうやうへましかふし

一せりかくののろ

あけしの、のろ

おりあけたるきよらや

又いしへつは このて

かなへつは このて

勢理客ののろが

あけしののろが

おり上げた美しさよ

りっぱなへつ（道具名）を考案して

優れたへつを考案して

このオモロは、〈例9〉を参考にすれば明らかなように、沖縄本島今帰仁村勢理客ののろ「あけしのか」が、「いしへつ／かなへつ」を考案して城（または、御嶽）の石垣を造ることを謡ったものである。築かれた石垣を称える根拠が、〈例10〉では、「あまみきよ」にあったようにこのオモロでは、神女「あけしの」にあることは繰り返すまでもない。と同時に、このオモロは第一七「恩納より上のおもろ御さうし」として、城（または、御嶽）の石垣を築いた今帰仁勢理客の神女「あけしの」の賛歌にも、当然なっている。すなわち、オモロが聖なるものの根拠を〈生産叙事〉のつくり手に多く置いているのは、オモロが他の長詩形のウタときわだつかたちで、人物賛美を謡っていることと、対

応じたものであるということなのである。

前述したように、オモロの《生産叙事》は、まとまった長さの表現をもつウタがほとんどみられなく、多くが短形になっている。その上、双紙中の《生産叙事歌》は多いとはいえず、その種類も豊富にあるとはいえない。しかしながら、特筆すべきは琉球弧における長詩形の歌謡の中にあって、様々な点できわだつ特色をみせる王権の歌謡、オモロにも、奄美から八重山にかけて普遍的な表現として存在する《生産叙事》があるのだということである。それほどに、根強い表現様式として《生産叙事》は存在しているということなのである。

では、《生産叙事》を謡うことの少ないオモロは、ものをどのように謡うのか。それは、あたり前のことになるが、オモロの表現は多くがものの出自を謡わず、ものがそのまま謡い出されるかたちをとるということである。つまり、《生産叙事》の観点を貫けば、完成された時点のものが謡い出される表現をとるものだといえよう。それを物語る例として、捧げられる神酒が器に溢れんばかりになみなみと豊かに注がれている状態を示す「なかもち／はたよらち」という常套的な表現が、オモロと他のウタとにどのように表現されているかを、次に示してみる。

〔例14〕

117 シノゴノオモイ（国頭間切）

一 おふたうばる のほて
二 しんたうばる のほて
三 ませかたに ちりわかち
四 あぶしかたに なげおとし
五 あしだかん かねおろち
六 きのかく くみよせて
（途中省略）
一 八まじん まじみちて
一 九おんさくは げらいみしやうち
二〇 あかゝねのおんよなわし
二一 なかもち
二二 はたよらち
二三 わがのろに おしやげればど
二四 まへちよらさ
二五 はくちちよらさ

大田原に上って
千田原に上って
枡形に切り分けて
畦形に薙ぎ落として
足高（牛の美称）もかね降ろして
角高（牛の美称）踏み寄せて
（途中省略）
・真積みを真積み満たして
御神酒を作りなさつて
あか金の御世直し（器の名）
中盛らして
端揺して
我が祝女に押し上げたらこそ
目眉が美しい
齒が美しい

〔「諸間切のろくもいのおもちり」〕

〈例15〉

第一四—1039 (58)

一きこゑよんたむさ

あかかねのよなおし

中もちへ

あんしおそいに みおやせ

又とよむよんたむさ

あかかねのよなおし

聞えたる読谷の

あか金の世直し(器の名)

中盛らして

按司襲いに奉れ

鳴響みたる読谷の

あか金の世直し

〔例14〕は、神酒が醸成され、それがあか金の世直し皿に溢れんばかりに入っている様子を表した表現「なかもち／はたもち」を、米の生産から謡っている〈生産叙事歌〉である。一方、オモロは神酒の出自を謡わず、「中もちへ」がそのまま謡い出されていることがわかる。別の言い方をすれば、オモロは〈生産叙事〉の完成時の表現を、そのまま謡い出したといえることがきょう。もっとも、他のウタの中にもこのような表現の例をみることができ、しかし、オモロの用例として唯一の用例であるこの常套的な表現が、例にみたようなものとしてあるのは偶然ではないのである。加えて、〔例15〕は、一般の〈生産叙事歌〉がそうであるように神酒を捧げる対象が神女「のろ」であ

るのに対して、オモロは王「あんしおそい」になっていることも、王権歌謡としてのオモロの特色をよく表わしている。

それはともかくとして、ものの出自を謡うことの少ないオモロは、例えば航海の安全を謡うならばそれをどのように表現するのか。つまりは、〈生産叙事〉が聖なる出自と理想的な生産過程とを謡うことで、優れた船として称えられ、それによって安全な航海が保証されるという表現は、オモロではどうなるのか。ひとつには、一五首ものオモロの「反復部」にみることができ「あん まふて」とわたしわれ(吾を守って、此大海を渡し給え)「(二三—815他)」という繰り返し願われる、航海安全の祈りによって、無事な航行を確保しているようである。そして、また四〇首余りものオモロの「連続部」にみられる、例の「(前半省略) 又あさとれか しよれは 又ようとれか しよれは 又いたよらは おしうけて 又たなきよらは おしうけて 又ふなこ めらて のせて 又てかち めらて のせて(朝風ぎになると、夕風ぎになると、板清ら(船の美称)を浮かべて、棚清ら(船の美称)を浮かべて、船子(船員)を選びすぐり乗せて、手楫(船子の対句)を選びすぐり乗せて)」(一〇—515他)」という有名な常套表現を謡うことで、航行の無事を確保しているように思われる。この表現は、一〇—524等のオモロで充分うかがえるように、始源的には神の海上での移動を表現した〈巡行叙事〉であって、これを謡うことによって理想的な船出と航行を保証しようとしたのだと考えられる。⁽³⁶⁾

これは航海に関する場合になるが、「生産叙事」を謡うことが少ないオモロは、別の表現をとることによって、航行の無事、航海の安全を表現として、確保しているのである。

注

- (1)「紡織叙事歌考」(69年・「沖縄文化」29号)、「稲の叙事詩」(71年・「田唄研究」14号)、「生産叙事歌をめぐって」(77年・「文学」第45巻第3号)の諸論文。これらは、『南島の古歌謡』(77年・ジャパン・パブリッシャーズ)に収録されている。
- (2)「古代のうたの表現の論理——〈生産叙事〉からの〈読み〉——」(83年・「文学」第51巻第5号)、『古代和歌の発生』88年・東京大学出版会所収。
- (3)「沖縄篇上」(80年・角川書店・外間守善・玉城政美篇)、『奄美篇』(79年・角川書店・田畑英勝・亀井勝信・外間守善。なお、訳文は私見により一部改めた。以下、同じ)。
- (4)『今帰仁方言辞典』(83年・角川書店・仲宗根政善)。
- (5)「おー」については、仲松弥秀「神と村」(68年・琉球大学沖縄文化研究所)・谷川健一「民俗の神」(75年・淡交社)・外間守善「日本語の世界9 沖縄の言葉」(81年・中央公論社)等がある。
- (6)前者は、『小野重朗先生念壽記念論文集 南西日本の歴史と民俗』(90年・第一書房)・後者は『沖縄文化研究 17』(91年・法政大学沖縄文化研究所紀要)に収録されたもの。
- (7)オモロの引用は、『尚家本 おもろさうし 複製本』(79年・80年・沖縄県立博物館監修・ひるぎ社)による。なお、「反復部」と想定したものは一字下げて記した。
- (8)一三—79の一首前のオモロ、78は地名が見えなくこのものか決め難いが、オモロ中に「おきおほち」(大祖父)がある。この語は、他の表記も含めて78以外は、第十一、二二巻しか用例がなく、まず久米島

関係のオモロと想定できる。また、その一首前の77もこのものか決め難いが、オモロ中にある「なよくら」(神女名)は、「大にし」(読谷、一三—82他)「か、す」(宜野湾市嘉数、一五—1094他)・首里(六—333)にいる神女だが、久米島の神女としての用例(二—1464他)があり、「仲里旧記」中の神名にもみえることから、これも久米島関係のオモロとしてよからう。ここでは、これ以上詳しく論ずるゆとりはないが、さらに久米島関係のオモロが連続している可能性がある。

- (9)「おもろ新釈」(仲原善忠、『全集』第二巻・77年・沖縄タイムス社所収)は、「船頭」としているが、池宮正治は「鳥船」(「おもろさうし精華抄」87年・ひるぎ社所収)では「船大工であろう」としている。(「生産叙事」の観点からも、池宮の解釈がよからう)。

- (10)「やま、もり、たけ」(服部四郎、『沖縄文化論叢5 言語編』外間守善編・72年・平凡社所収)参照。
- (11)86年・角川書店。

- (12)なお、「おもろ新釈」は対句の「おほかくち」の語注を、「鳥尻部落の東嶽の別名」としている。
- (13)(5)の外間論文参照。

- (14)(例3)を始源的なウタとしてとらえれば、「ほこりころかま」は船大工としてとらえた方がよからう。但し、詳しくは後述するように「へけらへる」は造り整えるという意味の語であり、整える意に比重を置いて理解すれば、船頭ということにならう。

- (15)「大成 沖縄篇上」からの引用だが、このウタは「沖縄民俗」第13号(67年)に収録されたもの。

- (16)このオモロの「反復部」は、「なてまつは」以下とも、あるいは「はなうちかま」以下とも考えられる。「きみはいは」以下「はなうちかま すたちへ」までが一連の意味的なまとまりを持った表現であること等を考慮して、とりあえず「とふとり」と以下を「反復部」とした。

- (17)外間守善・仲原善忠・角川書店・78年。

(18) 尚家本は、「すりより」。「より」を居りとし、「すり」を動詞（例えば、「スリン」元気づく、生気付くⅡ「八重山語彙」）として考えることができるが、『校本 おもろさうし』（外間守善・仲原善忠・角川書店・72年）に従った。

(19) 『混効験集』には
けらいて 造営并調和の事也

おもろ御さうしに十尋とのけらいて八尋とのけらいてと有は造営の事 食事などのけらいていふ時は調和なり 又けらい言葉と云時は上へ懇懇に言葉をとり繕ひ物を申をいふとある。

(20) 外間守善・西郷信綱・岩波書店・72年。

(21) 国立国語研究所・大蔵省印刷局・63年。

(22) 第一〇巻は、神や神に位置する者の巡行を謡ったオモロを基本とする巻だと考えられる。

(23) 例えば、第五巻「首里おもろの御さうし」なら、このようなとらえ方ができるかもしれない。第五巻は、多くの「オモロ歌唱者」達によって、王や王城が称えられたオモロが多い。但し、オモロには察度を称えたとわかる明かなウタは、みあたらない。なお、『琉球国由来記』『琉球国旧記』にも、護国寺の建立は察度王代のものだとするが、察度が造ったとしているわけではない。

(24) 『辞典』は「うちま」を、現在の西原町内間としているが、これは誤りだろう。

(25) 『沖縄大百科事典』（83年・沖縄タイムス、「掟 ウッチ」高良倉吉執筆の項）。但し、高良は、「ウッチは〈おきて（掟）〉の訛ったものだといわれるが言語学的な論証はまだなされていない」とも、いつている。

(26) 『琉球列島 植物方言集』天野鉄夫・79年・新星図書出版。『植物方言集』には、「ナネーズは、7回結実する意で、暴風後毎回結実することに由来」という、注がみえる。同様な記述は、『沖縄の植物と民俗

——玉置和夫遺稿集——」（遺稿集刊行会・79年）にもある。

(27) 拙論「琉球弧の『生産叙事』歌謡——表現を中心に——」。

(28) オモロにおける〈生産叙事歌〉は、この布織りのほかに、漁労の〈生産叙事歌〉（十一—650）をあげるこ
とができる。

(29) 伊波普猷は「日本旅何買ひが上て——古琉球の航海並に造船術についての試験——」（『沖縄日報』37年1月1日、『全集』第9巻・75年・平凡社所収）で、「やくさくわ」が、「山原の神唄」（金武祝女くもいの、神あしやげで謡ふオモリ）にでてくる「やくし子」と同語だとしている。オモリの例は、「女子の為さめ／やくし子の為さめ」と対句のかたちででてくるもので、あるいは「やくさくわ」は「女子」と近い意の語かもしれない。しかし、撰ばれた者、大切な者を表す表現として一人子があるようにも思われ（例えば、八重山歌謡の「首里人ゆんた」の「びとよりヤー子ばよう 生りヤーとより／たんざヤー子ばよう 生りとより」というような表現）、やはり「やくさくわ」は、一人子というような意味をさすのだと考えられるか。

(30) 高橋俊三「『おもろさうし』における動詞の活用（五）」（『沖縄国際大学文学部紀要（国文学篇）』第17巻第1号・88年）、後に「おもろさうしの動詞の研究」91年・武蔵野書院所収。また、宮良当壮「八重山語彙」にも、「①木の実などが熟して枝より離れ落つ」（以下、略。「アイン」の項）がある。

(31) 『辞典』は、「まな」を「一般の人。民衆」などとしているが、有名な識名盛命の「思出草」には、交流を結んだ鹿児島の人に対して、「野本氏の真人」「平野氏の左衛門なりける真人」などという言い方が多くされ、「まな」は相手を誉めた言葉としてある。オモロの「まな」も、ある一定以上の層を称えた言葉だろう。

(32) 池宮正治「沖縄の文学伝統」（『文化評論』第91号・69年、『琉球文学論』沖縄タイムス社、76年所収）。

(33) 用語は、古橋信孝「古代の歌の表現の論理——〈巡行叙事〉——」(『文学』第52巻第5号・84年)、「古代和歌の発生」所収)による。但し、古橋はそれを「始源的には村立ての起源を語る神謡としてあった」としている。馬に乗った姿として表現される陸上での〈巡行叙事〉は、〈生産叙事〉同様、奄美から八重山までの琉球弧全体にみられる表現である。そしてこれも、〈生産叙事〉同様、八重山にはパロディ化した〈巡行叙事〉があることは、注目すべきことである。なお、機会があれば、いずれこれも発表したいと思う。

(34) ただ、〈例10〉の「あまみきよか たくたるくすく」という表現は、王権神話に依拠した眷めことば化した一種のフレーズだろう。例えば、時々みる「やまと やしろから くだたる——(大和 やしろから下った)」（『奄美篇』P.82「78火の神祭り(2)」）というような表現と同質なものであろう。

(35) 〈例1〉と同じモチーフを謡ったと考えられる大和に玉をもとめにくというウタがオモロ(二一—637 二一—1497)にもあるが、オモロには船造りの〈生産叙事〉がない。これも、オモロの表現の傾向と一致している。

(36) 「あさとれ／ようにとれ」の表現が、〈巡行叙事〉との指摘は、古橋信孝によってなされた。本稿の基になった「琉球の叙事的歌謡とオモロの表現をめぐって」(奄美沖縄民間文芸研究会・古典と民俗の会合同大会口頭発表・88年7月10日)を発表した際のことである。なお、嘉手苅千鶴子は「あさとれ／ようにとれ」を「元来は航海の平穩無事の予祝をこめて用いられた呪術言葉」(「おもろと万葉——航海に関わる表現よみみた——」『沖縄国際大学文学部紀要(国文学篇)』第15巻第1号・86年)としている。「あさとれ／ようにとれ」を表現としてとりだした早い時期の仕事である。

〈付記〉本稿は、注(36)で示したごとく、「琉球の叙事的歌謡とオモロの表現をめぐって」(口頭発表・88年)を基礎にしているが、その後、前述した二本の〈生産叙事〉に関する拙論と、調査を踏まえて、大幅に書き

改めたものである。なお、本稿は、平成三年度文部省科学研究費補助金(奨励研究(B))による研究成果の一部である。